

軍記物語の女性たち（6）

建礼門院徳子

—『平家物語』—より

岡崎 嘉彦

建礼門院徳子。平清盛の三女として生まれる。母は後に二位の尼と呼ばれる時子。保元・平治の乱を経て関白の地位に就いた清盛は、その立場を盤石なものとするため承安元（1171）年、十七歳の娘徳子を高倉天皇の妃とする。

治承二（1178）年、徳子は後の安徳帝を出産し、その三年後には「建礼門院」の院号が宣下された。後白河法皇と清盛の思惑により結婚した二人であったが、こうした政略性を超え仲睦まじい関係となっていた。しかし、幸せな日々は長くは続かず治承三（1179）年に、父清盛が政変を起こし、後白河法皇を幽閉して幼少の安徳天皇が即位することとなる。そして、高倉天皇は上皇の位に就いた事に端を発し、やがて病魔にとりつかれ、翌年遂に崩御する。悲しみに暮れる徳子であるが、この頃、清盛は後白河法皇との関係修復を考えていた。そのため徳子が、亡き夫で高倉天皇の父でもある後白河法皇の妻となる話が持ち上がったのである。これには徳子も色をなして怒って頑なに固辞し、法皇の妻となることは回避される。その後、父清盛が死去すると平氏一門は大きく勢力を失い、平氏は安徳帝と徳子を伴って西国へと落ち延びていく。実家の衰退によって都を離れなければならない徳子にとっては辛く、過酷な逃避行となる。そして、寿永二（1183）年、屋島の戦いで敗れた平氏は、壇ノ浦の戦いで最期の時を迎えようとしていた。安徳帝と二位の尼は共に入水し、徳子もその後を追う。しかし、徳子だけが源氏方に引き上げられて命を取り留める。都に連れ戻された徳子は死ぬことも出来ずに出家の道を歩むこととなる。その後は、息子安徳帝をはじめ一門の菩提を弔いつつ、大原の寂光院で人目を忍んでひっそりと暮らし、その波乱に満ちた生涯を終えた。

軍記物である『平家物語』に登場する女性たちの中で、徳子は例外的に大きな役割を担う女性である。入内から安徳帝の出産、そして平氏

の滅亡に関わる中心的な役割を果たした女性で、物語を構成していく上ではなくてはならない存在であった。天皇の母という当時の女性としては最高の権力と地位を持ちながら、自分の主張や考えを述べず、ただ周りに翻弄されるがまま、自身の運命を受け入れる。唯一彼女が自分の意志を示したのは、義父後白河法皇の妃になるという話が持ち上がったときだけである。そうした意味から、彼女は後の世では消極的かつ、受け身な態度を示した女性と評されている。

平氏一門の繁栄のために天皇の妃となり、安徳帝を設けて国母となった徳子。一旦は、女性の頂点に立ちながらも愛する夫に先立たれ、我が子と心の支えであった一門は滅んでしまう。そして自身は囚われの身となり、出家をして息子安徳帝と実家である平氏一門の弔いをするに残りの人生を仏門に捧げた。

皮肉なことに、この洛北の地大原での日々が、激動の人生を歩んできた徳子にとって、もっとも心が休まる日々であったのかも知れない。彼女にとって、一番欲しかったのは平凡な女性としての幸せで、家族との平和な生活だったのではないだろうか。結局、その願いは叶うことがなかったが、その無垢で純粋な心は物語のヒロインとして、魅力的に思えてならないのである。

今や夢

昔や夢と迷はれて

いかに思へどうつつとぞなき

■主な参考文献、そして、今回おすすめする図書

○高橋貞一校注『平家物語』（上・下）
講談社 1972年。

おかざき よしひこ（司書・情報サービス課）